新制作

会報 No.48
発行
2004年12月15日
編集・発行人
日 高 單 也

発行 新制作協会 〒110-0013 東京都台東区入谷2-4-2 増田ビル202 Tel.03-5603-8350 Fax.03-5603-8360
http://www.shinseisaku.jp/

2004年第68回新制作展点描

第68回新制作展

新会員・受賞者紹介

新会員

絵画部

浅野高延（あさのたかのぶ）

◆毎日毎日が自問自答の作品制作の日々でした。そのような中、初入選を機に毎年9月の新制作展が目標となり、それからは、迷いを振り払うようただがむしゃらに描いてきました。会員にご推挙頂いた今となっても、私にとって作品を制作する厳しさや難しさに変わりありません。これからも勇気を持って真直ぐにキャンバスと向かい合ってゆきたいと思います。

◆一九七二年愛知県生まれ。一九五五年近畿大学文芸学部芸術学科卒業。一九九八年第62回新制作展初入選。第63回、64回、65回新制作展新作家賞受賞。

石井礼子（いしいれいこ）

◆多くの方々に支えられて小学生の頃から夢だった新制作協会の会員に推挙いただくことができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

これからも制作活動に励んでゆきたいと思います。今後ともよろしくご指導下さいますようお願いいたします。

◆一九七四年東京都生まれ。一九九九年女子美術大学大学院修了。一九九六年第60回新制作展初入選。第64回、65回、66回新制作展新作家賞受賞。

杉野和子（すぎのかずこ）

◆絵は、私にとって全てを映し出す鏡のようなものです。「何を描くか」と共に、「どのように生きるか」についても、学んできたように思います。

これからも私なりの「万巻の書と万里の路」を楽しみながら、より自分らしく、より前進と変化ができるよう修練していきたいと思います。

◆一九四五年静岡県生まれ。一九六八年武蔵野美術大学芸能デザイン科卒業。一九九三年第57回新制作展初入選。第64回、65回、67回新制作展新作家賞受賞。

鈴木喜美子（すずききみこ）

◆20数年前、日光の帰りに何気なく立ち寄った足尾の風景を今も忘れることが出来ません。石が、カラカラと転がり落ちる荒涼とした自然に圧倒されました。それ以来、ずっと足尾をテーマに創作活動を続けてきました。不器用な私ですが、これからも足尾の変化を追求していくつもりです。

◆一九四三年埼玉県生まれ。一九八一年第45回新制作展初出品初入選。第64回新制作展新作家賞受賞。

松尾萬里（まつおまり）

◆20代に、三岸節子さんの絵に出会って新制作協会を知るようになりました。それがきっかけになって新制作展に出品するようになりました。ずいぶんと昔のことです。毎回の新制作展への出品は、ふり返りますと、あっという間の年月でした。この年月が、制作を続ける私の原動力となっております。今後、この原動力がさらにパワーアップ出来ればと思っております。

◆一九四一年旧奉天市生まれ。一九六五年大阪学芸大学芸術専攻科卒業。一九九六年第60回新制作展新作家賞受賞。

間中敏子（まなかとしこ）

◆新制作展に憧れ、熱い想いを抱きながら出品を続けて参りました。この度思いがけず会員推挙の朗報を頂き、光栄に存じます。

〝私は鈍牛〟と言いながらも、思えば長い道程でしたが、その道の起伏の中で多くの糧を得ることが出来ました。鈍牛が急に駿馬になることも出来ません。やはり一歩ずつ歩を進めて参ります。

◆一九三六年東京都生まれ。一九六一年共立女子短期大学英文科卒業。一九六九年第33回新制作展初入選。第46回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部

川村兼章（かわむらけんしょう）

◆この度は会員に推挙して頂きありがとうございます。21世紀になって四年になりますが、この四年間は自分流の作品を心がけて制作してきたように思われます。それまでの作品は習作的要素の強い作品でしたが、それはそれで良いステップになったと思います。これからも、初心を忘れず、しかも自分のセンスを素直に表現してゆきたいです。そして、22世紀に

残るような作品を、一生に一つでも作れたら幸せだと思います。

◆一九六九年神奈川県生まれ。一九九五年日本大学大学院造形芸術専攻修士課程修了。一九九一年第55回新制作展初入選。第65回、66回、67回新制作展新作家賞受賞。

竹田正美（たけだ まさみ）

◆一生一回きりの人生。その中で限りなく生きて…生きて…生きたい！

結婚するとき家内の両親から、ギャンブルはやるか？と聞かれ、「自分の人生そのものがギャンブルです」と答え、明るい子だぁと爆笑され、就職面接で「彫刻制作は自分の命そのものです」ハッ…としらけられ、実際本人としては、至っていつも真剣そのものです。

今後も生きてる証として彫刻を創り続け、新制作展においても生きてる精一杯の表現として彫刻を提示していきたい。

◆一九五五年愛知県生まれ。一九七八年愛知県立芸術大学彫刻科卒業。一九八四年第48回新制作展初入選。第63回、64回新制作展新作家賞受賞。

スペースデザイン部

雨山智子（あめやま ともこ）

◆多感な年頃に初めて新制作展に出会ってから、30年以上が過ぎました。振り返ると、今もご活躍の方々の斬新な作品に驚嘆している年若い自分や、貴重な時間の積み重ねの中で日々制作をしている先人の方々の後ろ姿が思い起こされます。

まだ見ていない私自身の新しい作品に出会えるように、つくる視点を大切に制作していきたいと思っております。

◆一九五六年東京都生まれ。一九七九年文化女子大学卒業。一九八八年第52回新制作展初入選。第59回、67回新制作展新作家賞受賞。

加藤徹（かとう とおる）

◆思うようにならない土と対峙し右往左往する制作の中で、弱い自分が顔をのぞかせ、不安を押し込める理由を必死で探している、そんな日々が続きます。

今回の会員推挙にうわつく自分に「空間を考える実験的な場で自分の成すべきことに挑戦し続けることが重要」と言い聞かせているところです。創作を楽しむために、勇気・努力・気力・心意気を常に持ち続けていければと考えております。

◆一九六二年東京都生まれ。一九八五年武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科卒業。一九九〇年第54回新制作展初入選。第65回、66回新制作展新作家賞受賞。

新作家賞

絵画部

秋葉直樹（福島）　阿曽沼明（広島）
一居弘美（滋賀）　勝あらた（東京）
田中直子（奈良）　沼本秀昭（広島）
眞野眞理子（千葉）　馬淵哲（滋賀）
溝呂木時子（宮城）　二宅弘子（大阪）
渡辺久子（岐阜）

彫刻部

奥田真澄（奈良）　加藤裕之（岩手）
新美正樹（愛知）　木田悦久（東京）
吉村維元（千葉）

スペースデザイン部

川島源次郎（長崎）　下山肇（神奈川）
前田亮二（愛媛）

入場者アンケート調査の結果について

今まで把握されてこなかった入場者の状況を調べるために、68回展会期中にアンケート調査を実施いたしました。性別・職業・年齢・住所等の基本情報に加え、美術館移転に伴う支障の有無や来館動機など、来場者に対する新サービスの提供も視野に入れた合計九つの項目について質問いたしました。有料入場者・招待者を合わせて約二四〇〇人からいただいた回答の集計より、年齢では60歳代が全体の四分の一と群を抜いて多く、また、美術館移転については約2割の方から「支障あり」との答が寄せられています。さらに詳しく年齢別の分析を予定しておりますので、最終的な結果がまとまり次第、あらためて報告させていただきます。

（協会委員会）

受賞作家展

68回展新作家賞受賞者による受賞作家展を左記のとおり開催いたします。開催初日にはオープニングパーティーも行います。皆さまのお出でをお待ちします。

絵画部

■会　期　05年1月17日(月)～27日(木)
■会　場　ごらくギャラリー
☎03－3571－3706

彫刻部

■会　期　05年2月21日(月)～3月5日(土)
■会　場　ギャラリーせいほう
☎03－3573－2468

スペースデザイン部

■会　期　05年2月13日(日)～2月26日(土)
■会　場　画廊るたん
☎03－3541－0522

審査感想

●絵画部の審査について　石阪春生

第68回（二〇〇四年）の新制作展絵画部の審査委員長の役目が私に廻ってきたので、お引き受けすることにした。

搬入者数三三三人、搬入点数八四九点ということで始まった。昨年に比べると搬入者数三五五人から三三三人とやや今年は減少傾向である。初日は、搬入作品の中からB（保留）、C（落選）の二つに分類する作業から始まった。その中で二点以上Bに残った作家は今年に限って賞候補者となり、その氏名を掲示するということになった。これは全く新しい方法で、聞くところによると、4月7日の絵画部の部会で決まっていたようである。また、毎年二点入選作家が入賞することがやや常識になりかけていたが、今年は一点入選作家からも推薦する方向にしたいということになった。

審査二日目は、A（入選）、B（保留）、C（落選）という分類を行い、結局、入選者二五一人で入選点数二五一点と一人一点としぼられた。例年に比べれば非常に珍しいことになった。

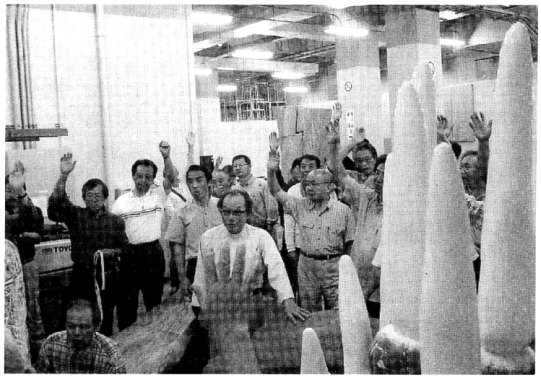
前日の二点入選作家が全部一点になってしまったわけだが、これは各審査員のどういう意志の現れなのかと思ったり、意外と二点入選作家の作品に力がなかったということなのかもしれない。

審査の流れのなかで、初入選者の作品が特に気になったが、あまり優れた作品はなく平均的なものが多く見られ、内容としては少しリズムのない画面づくりの様子が見られた。つまり、作品としては真面目なのだが、気持で絵を描いていないので、もうひとつ絵画的なふくらみを感じなかったような気がする。それと同時に、なぜか漫画的、戯画的なコンセプトを感じる作品も多くあったことが印象的である。全体的にやや技術性をもう少し考えてもいいのではないか。これは初入選者以外にも感じたことである。

（絵画部会員）

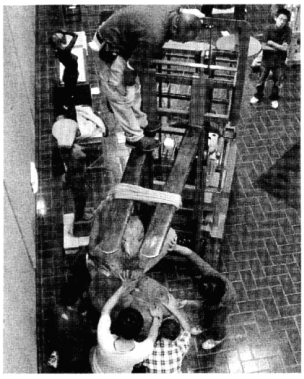
●彫刻部審査報告　渡辺隆根

第68回展彫刻部の応募点数は一八一点、応募者数は一一八名で、入選点数は八八点、入選者数は八六名でした。二点入選は二名、初入選者は一六名でした。長年出品を続けている作家の作品はそれぞれ研鑽の証しが明らかにあり、時間をかけて制作した作品を初めて新制作に出品し



てきた人達の作品もそれぞれ意欲的でした。それらの作品は総じて新制作に向けて制作され、厳しい審査を通過して残った作品群です。各種の素材で自由に表現された彫刻群ですが、各素材の種別の割合はほぼ均等で、素材を選ぶ自由さが定着し彫刻表現の広さが感じられます。それらの素材は彫刻表現の基本的材料である粘土、木、石、金属が主流であり、物質の中に思想を託するオーソドックスな彫刻群です。慌ただしく進む現代の美術の中で地道に真摯に彫刻に向かう姿勢が感じられます。大作を複数出品しているエネルギーに満ちた作家や、こつこつと自らの世界をつきつめる作家など、常に挑戦し、常に新しく、技量と感性を研く作家達です。新制作が広く深い研究と表現の場であることを願っています。新制作ならではの会場の充実さの中で、大きな作品は数点に限られるのですが、会場が狭く感じられるのはそれぞれの作品が空間を必要としているに違いありません。

（彫刻部会員）



●スペースデザイン部の審査

佐伯和子

審査はまずすべての作品を見ることから始まります。床置作品は歩き回り、壁面作品は一点ずつ吊り下げて。審査の順番による不公平を減らすために数年前から行っていることです。この時が一番素直に作品と向き合えて楽しいのですが、以降は審査というより自問自答、四苦八苦が続く長い一日です。

一点ずつ挙手し、その数で入選、保留、選外をまず決め、再度保留作品を検討し入落を決める。文章で書くと簡単な作業ですが、その間に、意見を述べ、聞き、反論し、ですから一点の決定に30分以上かかることもあります。決定に際し無挙手は認められていません。

また、専門分野の会員が全員賛成もしくは反対しても逆の決定になることも多くありますが、作品を広い視野で審査することもこの部の特徴の一つと考え納得できるように最近はなりました。年のせいでしょうか？

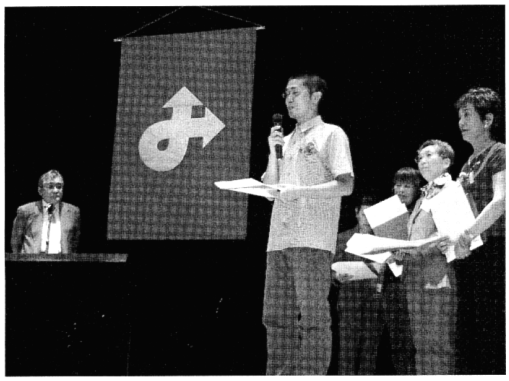
◎作家の意志を尊重し作品の欠点も含めて審査決定する（これは選外になる可能性が高い）

◎私達のアドバイスに従い作品修正する条件付き入選を認める

この二つの善意に基づく審査理念については何年も激論を繰り返してきましたが、現在は前者の方法をとっています。

今年から、展示担当者が、作品の大きさにカットした紙を決定後すぐ図面に貼りこんでいきながら審査を行いました。ボリュームをおおまかにつかめるために、展示に際しプランがたてやすく有効な方法であったと思います。パソコンを傍らに置いての作業になる日も近いことでしょう。

（SD部会員）



Gallery Talk

●絵画部

【F1会場】 参加者は会員6名（赤穴・荒井・張替・亀本・間中・高津）出品者及び参集者（開始時）32名。

第9室より出品目録の順序にしたがって、出席会員及び出品者の作品説明と講評を行いながら進行させた。

また、奥の突き当たりの壁面（第12室）について、今年度は全出品者が一点入選となったが、第一回審査で二点残っていた作家を賞候補として各フロアーともにここに展示したことを説明した。（なお、賞候補は第一回審査で一点の作家も含み、今年度から発表されることとなった。）

各出品者、また会員も自己の作品の前で作画意図の説明、批評あるいは質疑など現場での熱のこもったディスカッションは得るところが多かった。それは参加者が最後まで減少しなかったこと、幾人かの方から大変有益であったとのお礼の言葉に示されておりましょう。

なお、控室での雑談で「今年は初日が土曜日から始まったために、一週間遅れの土曜日をギャラリートーク日とした。年度によって異なるが、特に地方よりの出品者を考えて、初日あるいは第二日にも設けては」との意見があった。

（高津鐵朗）

【B1会場】太田(國)会員の進行で、田澤・鍋島・山口・小島の5会員のギャラリートーク担当と、参加者50～60人のなかで行われた。17、18室では、脇田和創立会員の作品の紹介の後、トーク担当がそれぞれ自分の作品の説明を行った。参加者からは、素材、技法などに関する質問が多く出た。19室には物故会員の遺作が展示してあり、田澤会員からそれぞれの先輩方の思い出を語って頂いた。その後出品者の講評に移った。まず出品者が自分の作品の説明をした後、各会員が講評するという形で行われた。20室は受賞者、新会員の作品が多く、受賞に至った理由やどの点が優れているかなどの質問が多く出た。

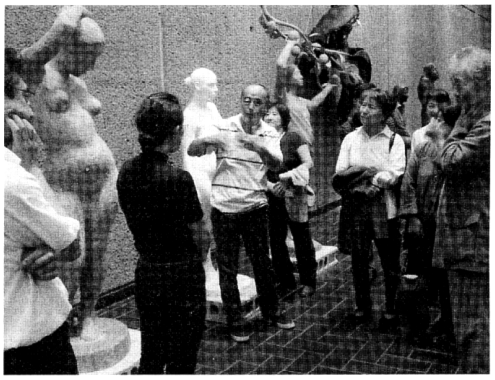
2時間10分にわたるギャラリートークは沢山の参加者の中で盛況のうちに終了した。

（小島隆三）

●彫刻部

彫刻部のギャラリートークは小彫刻室が照井さん、大彫刻室が私の担当で行われた。陳列順に参加された会員の作品を観て行った。

初めに大理石の瀧さんは線と面の構成について説明された。この作品の裏面に映る美しい陰影に「正面はどちら？」と言うギャラリーの声もあった。大国さんの木彫はWの形で中央の高い所に小鳥を止めてリズミカルな作品であった。ユーモアを交えて話をされていた。加藤さんの作品では造形的な追求のありかたについて懇切丁寧に解説されていた。この女性像の膝に乗る猫の顔が作者に似ているのではと話題にもなった。受賞者の加藤裕之さんは大きな木の抽象作品で、郷里の祭りや情景をモチーフとして生れたということであった。新会員・川村さんは、大きな鉄作品、騎馬像の制作工程を説明された。その気力と努力は相当なモノだナと思った。一般出品者の中からも数点取り上げた。会員の皆さんの厳しい批評や助言を受けていた。今後の勉強の糧になればと思う。



小彫刻室も盛況であったと報告された。

（番浦有爾）

●スペースデザイン部

恒例となったギャラリートークは、本年も40名以上の参加者を得て開催された。昨年に引き続き、降旗・西村の二名が進行役をつとめ、会員・一般出品を合わせ17の作品を取上げて行った。今回は、ト

ークテーマを特に設けず、自由なスタイルでの作品解説と質問への応答という流れで進めたこともあり、会場は終始なごやかな雰囲気であった。

トークの内容としては、多様な制作材料や特殊技術に関するタネ明かしの面白さもさることながら、制作の視点や旺盛な探求心、果敢に「今」を捉えようとする姿勢など、制作コンセプトに込めた想いについても多くの方々が語ってくださった。このことは、「スペースデザイン」という共通テーマのもと、SD部が追い求めていることの一端を知る最良の機会でもある。当日参加した者だけの情報交換に留めず、記録のホームページ公開等、公報活動としての新たな展開についても検討してよい時期ではないかと考えている。

（齋藤　学）

コラム こらむ

厳冬・シベリア

明山　應義

チェホフの「シベリアの旅」で始まる紀行文に「シベリアはどうしてこんなに寒いのかね？」「神様の思し召しでさ」と、がたくり馬車の馭者が答える…。

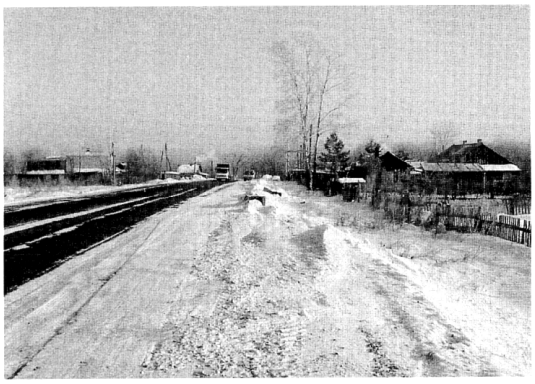
今は２００４年1月、飛行機の上空からの眼下はツンドラの原野が荒寥と広がり、地球創成の厳冬の荒々しい景観、正に神様の思し召しの地なのです。

極東の中心ハバロフスク、人口70万の街、空港に降り立つと手配しておいた通訳の女性と側に見知らぬ大男が出迎えてくれていた。男は女性の友達で刑事と聞く。給料が安いのでアルバイトで運転してくれると言う。因みに彼の給料は35歳で２００ドル、学校の教師がまた安く１２０ドル位、生活がとても大変なので何かとアルバイトを求めているのです。

翌朝、これから車で中国国境まで連れて行くと言うので迎えにきてくれた。外はマイナス30度、ダイヤモンド・ダストが降り注ぐ中、延々と続く白樺林の原野を通り抜け一直線に延びた道路を快走。途中活気あふれる屋外にある市場に寄り道、パウダースノーが舞い上がる売り場で、全ての人達が毛皮で防寒具しているのです。おそらく体感温度マイナス40度はあるでしょう、日本ではあまり帽子をかぶることのない私、時々帽子を忘れると容赦なく、帽子！と怒られる。ここに住む人達は常に死と隣り合わせなのです。厳しい、そして、凄いの一言。

そこの市場から2時間は走ったでしょうか、中国との国境に到着。鉄条網に囲まれた警備所、そこの警備所の側にいかにも自分がシベリアを守っているような面構えで小銃を担いで立っている若い国境警備兵、ここはまた格段に寒く特別の羊の毛皮を着ているという、想像以上の過酷な厳冬でのシベリアの人達の生活。でもそこには暗いシベリアはなく、屈託がなく明るく、そして、やさしいのです。一途な国境での警備兵、黒いミンクをまとった赤いほっぺの若い女性、市場の厳寒の路上で黙々と客を待つ老女。神様の思し召しの地で生きる姿に私もまた感動しているのです。

（絵画部会員）



ついてゆけない

丹羽　和子

かつて、良妻賢母をモットーとする女学校時代。こんな非常時に絵を描くなどという軟弱な人間は国賊に等しい。ましてや、美術学校に行くなど言語道断、医学か教師の道を選べと言われた。校長にも、親にも泣き落としの一手で上京。

ところが上野の美術学校は女には門を閉ざしており、致し方なく女子美術専門学校（現女子美術大学）へ入学。喜びも束の間、戦争という暗雲が色濃くなり、学徒動員、凸版印刷工場で毎日満州国のお札作り。その上、半年繰上げ卒業。うかうかしていれば、軍需工場で鉄砲の弾なんか造らねばならぬ。

伝（つて）を頼って大学の医学部で顕微鏡を覗いて細胞の組織を描いたり、時には解剖で臓器を描いたりする。とにかく絵を描く仕事だから文句は言えぬ。たまに人目

を忍んで屋外スケッチするのを見つかれば、「女のくせに何をやっとる！」と怒鳴られる。ああいやだ、こんな国にはついてゆけない。どこか外国へ行きたい…。何度溜息をついたことか――。

近頃のついて行けない症候群は、ＩＴ社会の目まぐるしい進歩。パソコンもケイタイも一応、遅れをとるまいと使ってみる。ケイタイも電源を切れば入れることを忘れ、不ケイタイ電話と言われ役に立たない。メールアドレスを入れれば迷惑メールばかりでついに腹を立て解約。若者が、パソコンで絵を描くと面白いと言う。しかし、やってみるとマウスも思うように動かず、出来たものは自分の意に反する。まして、キーボードなどは幼稚園の子供の方がはるかに速い。

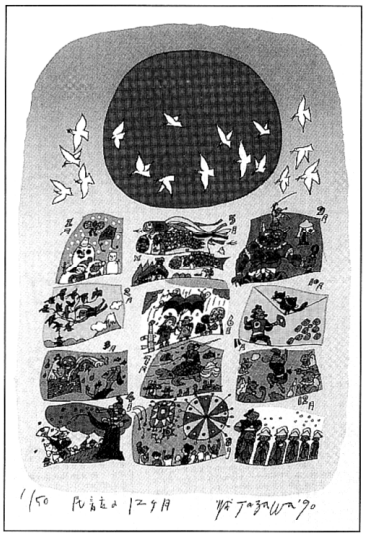
情報は刻々にＩＴのより高い可能性を伝えるが、すでに十五、六年前にコンピューターは人間の頭脳に近いものになり、自身が判断するようになると言われていたことを思い出す。

人間を忘れそうだ。私はますますついてゆけない。

（絵画部会員）

ひとと き

68回展の新作家賞の賞牌は絵画部の田澤茂氏に制作を依頼しました。



「民話の12ヶ月」
シルクスクリーン

《お 知 ら せ》

◇巡回展開催

＊第68回新制作京都展
（絵画・彫刻・スペースデザイン）
会期　04年10月21日(木)～10月31日(日)
会場　京都市美術館

＊第68回中部新制作絵画展
会期　04年11月9日(火)～11月14日(日)
会場　愛知県美術館

＊第68回新制作絵画広島展
会期　04年11月30日(火)～12月5日(日)
会場　広島県立美術館

《伝 言 板》

◇絵画部協友推挙

絵画部協友（入選15回以上）は、今年度は次の方々が推挙となりましたので報告いたします。

秋葉直樹（栃　木）　板谷論使（北海道）
塚田　裕（長　野）　矢吹幸子（奈　良）

◇新制作協会ｅメールアドレス

新制作協会の事務所で受けられるｅメールアドレスは以下の通りです。ご利用下さい。

「s-seisak @ violin.ocn. ne. jp」

訃 報

▼寺戸恒晴氏（絵画部会員）
二〇〇四年五月三十日、逝去されました。享年八十二歳。

▼土谷　武氏（彫刻部会員）
二〇〇四年十月十二日、逝去されました。享年七十八歳。

▼桑原佐吉氏（絵画部会員）
二〇〇四年十月二十九日、逝去されました。享年六十四歳。
心よりご冥福をお祈りいたします。

あ と が き

◆構造改革とは、まず自らを改革すること、とすでに百年以前に勝海舟が語っている。歳月は人を待たない。（福田）

◆高山寺はアッシジの聖フランチェスコ寺と兄弟寺。紅葉の古都で、鳥獣戯画とジオット壁画に想いを馳せた。（山口）

◆夏の猛暑、秋の台風、地震など異常気象に降り回された今年。来年は協会にとっても岐路の時。上野か六本木か。会員個々の決断が問われる時です。（藤森）

◆アンケート集計に同席しました。自由記述欄にも熱心な回答が多数寄せられています。最終報告による運営議論の高まりに、今から期待しています。（齋藤）

編集委員　絵画部・福田徳樹　山口都
彫刻部・藤森民雄　ＳＤ部・齋藤学
（吉國写植室）